

“境界領域”のヨーロッパ試論

——イストリア半島を事例に——

鈴木鉄忠

Europa as “Liminal Territories”: A Case Study of the Peninsula Istria

Tetsutada SUZUKI

This article aims to examine the meanings and implications of the concept of ‘the liminal territories’ (Niihara 2011) from a case study of the peninsula Istria (situated in a part of Croatia, Slovene, and Italy). This attempt contributes to understanding the diversity of borderlands in contemporary European societies.

Firstly, I review the three distinct aspects of the concept of ‘the liminal territories’: frontier territories, *liminality* and latent metamorphosi, then argue that those three aspects closely correspond to substantial territories such as geography and geopolitics, body and heterotopia in their spatial form. Searching a point of interconnection between conceptual meanings and empirical implications, I further consider the three stratum of the concept in terms of temporal form.

Secondly, I analyze the peninsula Istria as ‘frontier territories’ and show that a lacking of natural obstacle and advantageous position to the mobility of persons and commodities lead to commercial advantages, plurality of ethnicity and language and instability of political forces in Istria.

1. 問題設定——“境界領域”としてのヨーロッパに向けて

はじめに——「三つの根をもつ一本の樫の木」としてのイストリア

ヨーロッパ統合と拡大の最前線で、国境を越えた交流が新たに始まる。

イタリア・スロヴェニア・クロアチア国境地帯に位置するイストリア半島。三国の首都から見たら「辺境」だが、ヨーロッパ東方拡大から見れば最前線に位置する場所で2012年1月、市民団体「チルコロ・イストリア文化会」は設立30周年の記念祝賀会を催した。この団体は、前世紀の戦争と国境線の変更によりディアスポラとなったイタリア系「イストリア人」が、国境を越えた文化交流と地域コミュニティの形成のために結成した集まりだ。当日の記念祝賀会

には、イタリア、スロヴェニア、クロアチアから百名を超える出席者が集まった。同文化会代表のリヴィオ・ドリーゴ氏は、活動を総括してこのように述べた。「30年前にこの地域のことを考えて、いくつもの障害を乗り越える必要性を確信したとき、私たちは正しかった。グイード・ミーリャが言ったように、イストリアは『三つの根をもつ一本の大きな樫の木』なのです。その根は、イタリア、スロヴェニア、クロアチアからなるものです」と。しかし「三つの根」は、各々が異なった「歴史」「過去」「国民」をもち、それらが「一本の樫の木」をつくるのではないと強調する。「私たちが切に望むのは、文化活動を通じて考えがぶつかりあいながらも混じり合いつつ、この一つの地域の再生を新たに支えていくことです」と¹⁾。同文化会は現在、欧州連合(EU)の越境地域政策の事業に関与しながら、トリエステ(イタリア)、コーベル/カポディストリア(スロヴェニア)、ブーイエ(クロアチア)を拠点に根を張りつつ国境を越えた文化活動を展開している。

本稿の対象地域であるイストリアは、イタリア半島とバルカン半島に挟まれたアドリア海最北端に突き出た半島である(表-1参照)。現在はイタリア、スロヴェニア、クロアチアの三国にまたがる。南・中央・東ヨーロッパの交通の要所に位置することから、歴史的にラテン・ゲルマン・南スラヴ・ユダヤ系の言語・文化の多層性を特徴として地域形成が進んだ。国民国家の時代には、多言語・多文化の土地ゆえに幾度もの国際紛争に巻き込まれた。しかしながら1990年代以降、冷戦崩壊とEUの統合・拡大、それに伴うリージョンの活性化により、国民国家を相対化するプロセスがマクロ・トレンドで進行している。2013年夏にはクロアチアが第28番目のEU加盟国となることが決まっている。ところがローカルの動向に着目すると、前世紀の歴史認識をめぐるコンフリクトは終わっておらず、隣接諸国内外で緊張を生み出している。EUの掲げる「多様性の中の統一」が、イストリア半島において現実的な問題として現れている。

では、この「多様性」をどう捉えるか。その導きの糸として、新原道信は二つの視角を提起している。第1は「ひとつのヨーロッパ」である。すなわち、「社会をより組織化していくためにはむしろ多様性をシステム内部に取り込むことによってシステムそのものが強化されるという視角」である。ここでの焦点はシステムを中心部にある。そこで多様性は中心部からの偏差として捉えられる。第2は「いくつもの“もうひとつのヨーロッパ”」である。これは「互いの異質性を意識する個人や集団の、いわば“相対的な辺境性(marginalità relativa)”をもった視角」である。「相対的な辺境性」とは「《中心》のそれへと還元されないものの見方、世界観であり《自立》の基礎となりうるもの」²⁾を指し、そこで多様性は「質的に位相の異なる違いをもった個別のエレメントによって構成されるもの」として捉えられる³⁾。言い換えれば、それぞれ固有のまとまりをもちつつその内部と外部における差異が衝突しながらもゆるやかにまとまっているあり方の多様性である。こうした視角からイストリア半島を見るならば、イタ

リア、スロヴェニア、クロアチアという「三つの根」は、前世紀において「単一ルーツ型の根」として相対立した歴史的経路を辿りつつも、EU統合・拡大という新しいコンテキストのなかで、この地域一帯の自然環境の層、それによって促進されてきた人の移動と定着、文化的な層を資源としながら、「地中なり空中に網状組織としてひろがる多数化した……リゾーム」⁴⁾のように、「三つの根からなる一本の樫の木」を構成していくような“境界領域”として捉えられよう。

本稿の試論の目的は、イストリア半島を事例にヨーロッパの多様性を“境界領域”から捉え直すことである。第2章では、「いくつもの“もうひとつのヨーロッパ”」を捉えるためのキー

表-1 イストリア半島一帯の概要

対象地域		イストリア半島とイタリア北東部		
地方行政	フリウリ・ヴェネツィア・ジューリア自治州・トリエステの六つの自治体/州都トリエステ（人口209,557 ^{e)} ）	沿海カルスト地方の七つの自治体/コペル（人口47,539 ^{c)} ）は政令指定都市	イストラ群の十つの市と三十一の自治体/群都はバジン（人口9,227 ^{d)} ）だが、経済・文化の中心はプーラ（人口58,594 ^{d)} ）	
	国家	イタリア共和国	スロヴェニア共和国	クロアチア共和国
欧州連合（EU）	加盟国（1958年）	加盟国（2004年）	候補国（2013年7月加盟）	
面積km ²	212	1,044	3,600	
人口	240,638 ^{e)}	102,070 ^{c)}	206,344 ^{d)}	
産業構成 ^{a)}	第1次	0.7%	1.4%	2.8%
	第2次	20.9%	23.5%	38.3%
	第3次	78.4%	75.1%	58.9%
	注記	商業・金融・サービス比が高く、工業・運輸業は低下傾向	観光業比が高い。製造業は低い	1971-91年の工業化に伴う第1次産業の大幅低下。サービス業比が増加
民族構成	イタリア人	—	1,866 [1.8%] ^{c)}	14,284 [6.9%] ^{d)}
	スロヴェニア人	60,000人, [約10%] ^{b)}	73,357 [71.9%] ^{c)}	2,020 [0.9%] ^{d)}
	クロアチア人	—	4,279 [4.2%] ^{c)}	148,328 [71.9%] ^{d)}
	注記	トリエステとムッジャ以外はイタリア語とスロヴェニア語の二言語	スロヴェニア語とイタリア語の二言語	国内唯一のクロアチア語とイタリア語の二言語。「イストリア人」回答者が8,865人 [4.3%]

出所：a) A. M. Boileau, “Le caratteristiche socio-economiche degli ambiti territoriali”, A. Gasparini ed., *Problemi e prospettive dello sviluppo di Euroregioni sul confine nord-orientale italiano : il caso del Friuli-Venezia Giulia* (Gorizia : I.S.I.G., 2000), pp. 101-147. b) F. Toso, *Le minoranze linguistiche in Italia* (Bologna : Il Mulino, 2008), pp. 81-84. c) Statistical Office of the Republic of Slovenia, Census 2002. d) Croatian Bureau of Statistic, Census 2001. e) Provincia di Trieste, *Annuario demografico 2010*.

ワードとして“境界領域”を検討する。第3章では“テリトリーの境界領域”としてイストリア半島を論じる。

2. “境界領域”とは何か——方法と概念の検討

2.1 “境界領域”の三つの側面

ここでは新原道信が提示している“境界領域”⁵⁾(cum-finis, the liminal territories)”をイストリア半島に即して見ていきたい。新原はこのキーワードを通じて以下の三つの側面を指摘している。第1に、“テリトリーの境界領域 (frontier territories, liminal territories, terra di ‘confine’)”である。ここは「国家が引く境界線の突端, “端／果て (punte estreme / finis mundi)”, に位置する存在であると同時に, 一つの国家から見ると『他者』, 時には前人未到の地 (no-man’s-land) である場所へと境界をこえて往き来する領域」を指す⁶⁾。これはイストリア半島のように, 国民国家の境界線が幾度も引かれ, 現在も三国の国境線が接する地政学的な領域にあてはまる。イストリア半島が事実上現在のような区分になるのは, イタリアと旧ユーゴスラヴィアとの間では1954年, スロヴェニアとクロアチアの間では1991年の両国独立以降であった。この半島一帯は19世紀初頭にハプスブルク帝国(後にオーストリア・ハンガリー二重帝国)の統治下となった。全域が一つの統治システムのなかに組み込まれるのはそれが歴史上初めてであった。そして第一次世界大戦後に帝国が崩壊した後, 国民国家の時代に置かれた。第二次世界大戦の終結までの二十世紀前半期は, イストリア半島を統治する主体は7度も変わった。イタリア王国, ナチス・ドイツ, チトー軍による占領, 米英連合軍, 国際連合, そして1954年のイタリア共和国とユーゴスラヴィアといったように統治主体が変わるたびに, 国境線の引きなおしが行われた。国民国家のプロジェクトは, 文化・言語の混交の著しいこの地域に悲劇的な事件を幾度ももたらした。トリエステ郊外のナチ・ドイツ強制収容所, 市外後背地の旧ユーゴ軍の暴力によるイタリア人被害者を追悼する記念碑, ファシズム体制によるスロヴェニア人処刑を追悼する記念碑は, それらの悲劇を現在に伝える一方で, 隣接諸国間や国内政治の対立を引き起こす要因にもなっている。これまでの調査研究で明らかになってきたのは, こうした国境線引きが人々にとって「過ぎ去らない過去」となっていることである。これが次の“心身／身心現象の境界領域”と関連してくる。

第2に, “心身／身心現象の境界領域 (liminality, betwixt and between)”である。この側面は, 「個々人の身体に刻み込まれた一個々の内なる“深層／深淵”, 間主観性, 精神の境界の問題性」を含む⁷⁾。境界状態(リミナリティliminality)にある人間は「例外なく, あいまい(ambiguous)」であるとされる。すなわち, 「状態や地位を文化的空間に設定する分類の網の目から脱け出したり, あるいは, そこからはみ出して」おり, 「こちらにもいないしそちらにもいない」ような「どっちつかずのところにいる (betwixt and between)」存在である⁸⁾。こう

した両義性は、国境地帯に生きる人々の特徴を際立たせる。ネーションの分類にあてはめようとすれば、国境地帯の人々はイタリア人でもスロヴェニア人でもクロアチア人でもないと同時に、いずれでもありうる。こうした両義性は、国境地帯をその外部から見た場合に「誤解の空間（spazio del malinteso）」として特徴付けるものであった⁹⁾。第二次大戦後にイストリアを去ったイタリア系の人々はイタリア本国で「ファシスト」と蔑称された。そして当地に残留してイタリア系マイノリティとなった人々は祖国イタリアを捨てた「チトー主義者」とレッテルを貼られた。またスロヴェニア系およびクロアチア系の人々は、戦後直後にチトー軍が行った一連の暴力や追放により、愛国主義的なイタリア系の集団から「野蛮なスラヴ人」「民族浄化犯」と蔑称されてきた。こうした否定的なレッテル貼りが国境地帯の人々への外部からの見方を固定化させる。それがひるがえって当事者にも影響を与え、アイデンティティの不安定性や分裂を助長してしまう。さらに国境線の変更が実際に行われる場合、アイデンティティの危機が精神のみならず身体の出来事として根深く刻み込まれるのである。

冒頭で紹介した「チルコロ・イストリア文化会」は、誤解や偏見による一方的なレッテル貼りや度重なる国境線の変更による「根こぎ（sradicamento）」が地域住民の心身／身心に内面化したものを「心の境界線（confine mentale）」と呼び、その根深さを指摘している。それは「克服されることのない根源的な悲しみ」¹⁰⁾として当事者の心身／身心に沈殿し、アイデンティティの不確定性や危機をもたらす。この「心の境界線」を意識化することなしに、深い意味での国境を越えた文化交流はできないと考えている。なぜならこの「根こぎ」により損なわれた感覚が、人々の心身／身心に刻まれる犠牲者意識となり、それが愛国主義的な勢力の団結の源になっているからである¹¹⁾。そしてこの犠牲者意識が国家や愛国主義的政党によって利用され、ナショナル・アイデンティティの構築やナショナリズムに訴えるイベントに動員される。国境を越えた文化活動を進めていく上で過去の歴史が取り上げられるのは、こうした「根こぎ」によるアイデンティティの危機や「心の境界線」による相互不信を乗り越えるために、「過ぎ去らない過去」とどう和解するのが個々人にとっても集合的な意味でも重要な争点となっていることを示している¹²⁾。これを抑圧せずに意識化することで、「心の境界線」によって恣意的に分離を強いられていた社会関係に、変化がもたらされる。これが第3の側面と関連する。

第3に、“メタモルフォーゼの境界領域（metamorfosi nascenti）”である。この側面は、「特定の二者の“深層／深淵”における共感・共苦・共歎（compassione）の相互行為が（メルツチが言うところの『聴くことの二重性と二者性』）、複数の二者性のつらなりとして現象していく“未発の毛細血管現象／胎動／社会運動（movimenti nascenti）”と深くかかわる¹³⁾。ここでは第2の側面のアイデンティティの不確定性が、有意味な他者（それはH. アーレントのいう内なる他者性、〈一者のなかの二者〉¹⁴⁾でもありうる相手）との対話を通じて、互いが同一の

人間ながらも変異 (metamorphosis) していく契機として捉えられる¹⁵⁾。これを「異他なる反場所」としての「ヘテロトピア (heterotopia)」として捉えることができるだろう¹⁶⁾。ヘテロトピアは、どこにもない場所 (ユートピア) ではなく、私たちの日常生活の内部に実在する場所であり、ひとつの文化の内部に見出すことのできる他のすべての場所を表象する場所であると同時に、それらに異議申し立てを行う場所であり、ときには転倒してしまうような異他なる反場所とされる。

またシステム・レベルにおいてもこうした側面を見ることができる。それは「時代そのものの移動もしくは変転としての『時代のパサージュ (epoca di passaggio)』」とかかわり、そのような移行もしくは移転，“メタモルフォーゼ (変身・変異 change form / metamorfosi)” が噴出する時期・瞬間としての『変転の時代 (epoca di passaggio)』』とかかわる¹⁷⁾。例えばイストリア半島では、1980年代後半からユーゴスラヴィアが崩壊の危機に陥る時期に、イストリア地域主義運動が湧き起った。これを支持基盤にした地域政党の「イストリア民主会議」(Dieta Democratica Istriana, DDI-IDS) は、体制の崩壊と新しい独立国家誕生の隙間をぬって、自治を獲得した。当時クロアチア・ナショナリズムに訴える与党「クロアチア民主同盟」は全国に拠点を築いていたが、イストリアでは例外的にそれに失敗したのである¹⁸⁾。こうした「自らのアウトノミアを捻出しようとしてきた『間 (はざま)』『隙間』」ができ、システム・レベルでの「変容」もしくは「超越」が生じる境界的な時期が第3の側面といえる。現在のイストリア半島は、クロアチアのEU加盟によりその全域がヨーロッパの中に組み入れられる時期にあるが、そのEU自体が危機により揺らいでいる。またイタリアも危機に陥っており、政府の緊縮財政政策はイストリアのイタリア系マイノリティにも及び、その活動への助成金を大幅に減らしている。こうした意味でイストリアも時代の過渡期にあるといえる。

2.2 “境界領域” の三つの層

“境界領域”を実証レベルにブレーク・ダウンする目安が、それを構成する三つの層である¹⁹⁾。これらの三層は時間の層に関連付けて考えることができる。第1に、「地理的・物理的・生態学的・地政学的・文化的な層」は“テリトリーの境界領域”に関連する。この次元の層は、F. ブローデルが「環境・地理学的な時間」と呼んだもの、「人間を取り囲む環境と人間との関係の歴史」「ゆっくりと流れ、ゆっくりと変化し、しばしば回帰が繰り返され、絶えず循環しているような歴史」と関連する²⁰⁾。またA. メルッチの言う「円の時間」として捉えることができる²¹⁾。そして「地政学的」な層は、帝国や大国、国家といった統治システムがその領域を定義する境界線によって定められる。「文化的な層」は、言語、民族、エスニシティなどの象徴体系によって特徴付けられる圏域を示す。これらはブローデルのいう「緩慢なリズムをもつ歴史」「さまざまな人間集団の歴史であり、再編成の歴史」、社会史と関連する²²⁾。

あるいはメルッチの言う「社会的な時間」である。近代世界においてそれは「線形的な時間」として表象され、現代社会においては断続的な「点の時間」として知覚されるものである²³⁾。

第2に、「個々人の身体に埋め込まれ／植え込まれ／刻み込まれ／深く根を下ろした層」は“心身／身心現象の境界領域”と関わる。この時間層はメルッチの言う「内的時間」と深く関連している²⁴⁾。内的時間は「情緒や情動と結びついた時間」「身体に宿る時間」である。それは「多重／多層／多面的で不連続」であり、「計測不可能」である。そのため単一性、連続性、計測可能性、予測可能性をもった「社会的時間」と鋭く対立する。そこで心身／身心の変調や不調は、「内的時間」と「社会的時間」との間の矛盾の現われと捉えられる²⁵⁾。メルッチは「精神 (mind)」のみならず「身体 (body)」から発せられる無言の対話にどう耳を澄ますか²⁶⁾、そして社会的時間のなかでどう「聴くことの間」を確保するかまで問題の射程に含めている²⁷⁾。

第3に、「多方向へと拡散・流動する潜在力の顕在化を常態とする層」は“メタモルフォーズの境界領域”に対応する。この時間層は、メルッチの言う「螺旋の時間」に対応する²⁸⁾。ここには上述したすべての時間のパターンが入り混じっている。そしていずれの動きも「中心の回機軸」となる点を必要としており、それが現在性 (presentness) である。この現在性は「過去と未来が循環的な関係のなかで出会う場所」とされる²⁹⁾。しかしながら、過去と未来の衝突によってできた溝 (nunc stans) は極めて両義的である。複数性をもつ時間をいまこのときにおいて結びつけることができるならば、現在性は「未発の状態³⁰⁾ (statu nascenti)」として豊かさをスピル・オーバーする源泉となる。しかしそれに失敗すれば、無秩序なホブスの自然状態 (status naturalis) に陥る危険がある。例えばイストリアでは、第二次世界大戦末の権力の「空白期」に「フォイベ」と呼ばれる旧ユーゴ軍による暴力事件が起こり、多くのイタリア人や反体制とみなされた人々が犠牲になった³¹⁾。それゆえこの次元でおこる創発特性には、生成的なもの (generative) も無秩序なもの (chaotic) も同時に潜在していると思われる。いずれが現象するかはさらなる検討が必要だが、新原道信はこの第3の層が第1と第2の「両者の『間 (はざま)』『隙間』にある」とみている³²⁾。この点に留意すれば、第1と第3の層の何らかの要因を先行条件として、第2の層のある状態が顕在化すると仮説を立てることができるだろう。

以上、「境界領域」というキーワードを検討してきた。上記で論じた三つの側面は“境界領域”の空間的な現象形態、三つの層はそれぞれの時間的な現象形態としてまとめることができよう(表-2参照)。

表-2 “境界領域” の概念図

三つの側面 → 空間的形態	相互に関連	三つの層 → 時間的形態
(1) “テリトリーの境界領域” → 実体的な領域	①地理的・物理的・生態学的・地政学的・文化的な層 → 環境の時間（円の時間） → 社会的時間（線形／点列の時間） ②個々人の身体に埋め込まれ／植え込まれ／刻み込まれ／ 深く根を下ろした層 → 内的時間 ③多方向へと拡散・流動する潜在力の顕在化を常態とする層 → 螺旋の時間	
(2) “心身／身心現象の境界領域” → 身体		
(3) “メタモルフォーゼの境界領域” → ヘテロトピア		

出所：新原道信「“境界領域”のフィールドワーク(2)」『社会科学研究所年報—カーボベルデ諸島へのフィールドワークより』中央大学社会科学研究所，第16号，2011年，69ページの表-1を加筆・修正した。

3. “テリトリーの境界領域”としてのイストリア

前節の検討を踏まえ，ここでは“境界領域”を構成する第1の層である“テリトリーの境界領域”の観点から，イストリア半島を見ていく。まずイストリア半島一帯の自然環境の層に目を向ける。ここでは網羅的に見ていくというより，人の移動と定着に関連する側面に焦点をあてたい。なぜならそれがイストリアの文化的な層と地政学的な層を条件付けているからである。現在の地政学的な層に自然環境の層と文化的な層を重ねあわせることで，“テリトリーの境界領域”としてのイストリア半島の歴史的な重層性に注意を向けたい。

3.1 環境の時間——地理的・物理的・生態学的な層

E. ブローデルは地中海世界を「山地との間にある海」であり「海の複合体」³³⁾と捉えた。そしてこの世界を半島と海の二つに分けて考察している。これに示唆を受け，イストリア半島についても，それを構成する山地，高原，台地，丘陵，平野，そして海からなる複合体として見ていく。

山地はしばしば自然の障害として人や物の移動を制限する。しかしイストリア半島には，ピレネー山脈によって遮断されているイベリア半島やアルプス山脈によって隔てられているイタリア半島のような山脈が存在しない。むしろ移動に適した峠と台地が存在する。それが古来よりイタリア半島の肥沃な平野と中央ユーラシアをつなぐ「ヨーロッパ回廊地帯」の一部となっていた³⁴⁾。そのなかで重要な峠はヴィパッコ渓谷である。この峠は現在のイタリアとスロヴェニアの国境地帯にあり，ゴリツァとノヴァ・ゴリツァが位置する場にある。ここはイタリア半島と中央大陸を結ぶ商業ルートの機能を果たし，それによって政治・文化的な拠点がつくら

れた。ローマ時代にはアクイレイア、中世初期にはチヴィダーレ、中世後期にはウーディネが交通の要所として発展した。この峠からやや外れた位置にあるトリエステは近代になって初めて拠点としての重要性を得た³⁵⁾。

ヴィパッコ渓谷は商業にとって格好のルートだっただけではない。北方のジュリアン・アルプス山脈と東方のダルマチア地方後背部のデュナル・アルプス山脈との間に位置する峠として、大規模な人間集団の移動にとっても好都合な経路だった。とりわけユーラシア大陸から肥沃なイタリア半島の平野を目指す異民族の格好の進入経路だった。歴史的に見て大がかりな集団移動であったフン族、東ゴート族、ランゴバルド族、南スラヴ民族、アヴァーリ人、ハンガリー人、トルコ人はいずれもこの峠から侵入した³⁶⁾。こうした点から地理学者 G. ヴェルツシは、ヴェネツィア・ジュリア地域一帯の主要な特徴を「商業的な有利と政治的・軍事的な不利」との絶えざる緊張に見る。すなわち、人や物の移動を妨げるような自然の障害が存在しないことにより、商業上のメリットは高いが、逆に移動の管理や制限を目的とした政治・軍事的な観点からは不安定性を抱えているエリアなのである³⁷⁾。

こうした特徴はイストリア半島にもあてはまる。ヴィパッコ峠からやや南方に外れたイストリアだが、唯一大陸につながる北方のカルスト台地にも移動を制限するような自然の障害が存在しない³⁸⁾。もっとも標高の高いネヴォゾ山岳（1796メートル）でも、大陸から半島へ、またその逆方向も容易に移動ができた。西ローマ帝国崩壊期の5世紀後半から8世紀末頃まで、ユーラシア大陸の異民族が、現在のトリエステからリエカ／フィウーメにいたるカルスト台地を通過して、何度も半島全域に進入してきたことがそれを物語っている³⁹⁾。こうした峠や台地といった移動に便利な自然環境が、この地域一帯における民族集団の移動と定着を決定づけた⁴⁰⁾。7世紀頃の南スラヴ民族の進入とその後の封建制の導入は、今日のスロヴェニア人およびクロアチア人をイストリアの「三つの根」の二つを構成する要素となって今に到る。

さて、山岳を降りてイストリア半島の内陸部、そしてアドリア海へと進むとどうなるか。D. アルベリによれば、半島は相互にゆるやかに重なり合う三つの地理学的な類型によって構成される⁴¹⁾。それは「白色のイストリア (L'Istria bianca)」、 「緑色のイストリア (L'Istria verde)」、 「赤色のイストリア (L'Istria rossa)」と呼ばれる（図-3参照）。こうした名称は土壤の色彩に基づいている。まず半島北部から南西へ広がる「白色のイストリア」は、粘土質の石灰岩を含んだカルスト台地の「白色」に由来する。この地帯は標高約500メートル級の高原であり、半島の約10分の1の面積を占める。トリエステとリエカ／フィウーメを結ぶ道がローマ時代に作られ、現在も使われている交通ルートである。この一帯は自然環境の厳しさから人の定着が非常にゆっくりとしていた。密集した森林とカルスト台地に特有の水不足により、人々は肥沃な平野へと移っていった。19世紀頃になって、移牧により森林一帯が減少し、南スラヴ系の集団の入植が進み、近代的な交通手段と結びつくことにより人の定着が進んだ⁴²⁾。

図-3 イストリアの地理学的・物理的・生態学的な層



ヴェネツィア共和国の沿岸航海のルート

出所：D. Alberi, *Istria* (Trieste: Lint, 2001), p. 114 を参考に筆者が作成.

半島内陸を北東部から南西部へと延びる丘陵地帯が「緑色のイストリア」である⁴³⁾。標高約 300 メートル級の丘陵であり、その間にいくつもの渓谷が走る。半島の約 10 分の 2 の面積を占め、沿岸部のムッジャ、コーベル／カポディストリア、ピラン／ピラーノ、内陸部のバジン／ピジーノ、アルシャ／アルシアを含む。この一帯は、春夏期は鮮やかな緑色の樹木に覆われ、冬季は植生が灰色になるため、「緑色のイストリア」もしくは「灰色のイストリア」と名

付けられた。土壌と水の条件が植生に適しており、穀物、大豆、じゃが芋、野菜が育つ。

そして半島南部の大部分を占めるのが「赤色のイストリア」である⁴⁴⁾。緩やかな起伏をもつ標高約200メートルから0メートルの平野である。赤土で覆われているために「赤色のイストリア」と名付けられる。石灰質を含む土壌のため浸食作用を受けて起伏ができる。こうしてできた穴が「フォイベ (foibe)」と呼ばれ、その代表的なものがパジン／ピジーノの「フォイバ」である。この一帯は半島の10分の7の面積を占め、プーイエ、ボレチュ／パレンツォ、プーラ／ポーラ、ラビン／アルポーナの町を含む。常緑の低木や灌木が育ち、月桂樹などの香りの強い野草が生い茂る。耕作地帯にはブドウ、穀物、大豆、野菜が育つ。内陸部に入ると樅の木が生える（なお本稿冒頭の「三つの根をもつ一本の樅の木」の比喩は、この一帯で実際に見られる樅の木を指している）。なお、「緑色」と「赤色」のイストリア沿岸部は、ブローデルが「地中海の住環境の最適水準」と述べた自然環境である。「樹牆仕立ての国々」に特徴的な景観であるオリーブやブドウの果樹栽培がダルマチア地方沿岸のドロブニク／ラゲーザまで続く⁴⁵⁾。

最後に海はどうか。イストリア半島を囲むアドリア海は、歴史的に南北の交通路として機能した。ローマ時代にはローマと東地中海を結ぶ航路として重要視された。11世紀以降はヴェネツィア共和国が東方貿易のルートとして全海域を掌握し「ヴェネツィア湾」と称された。イストリア沿岸部はヴェネツィア共和国の沿岸航海 (costeggiare) の寄港地になっていた。後背地は船を造る木材やヴェネツィア市街の石畳を作る石の供給地となっていた。ヴェネツィア共和国の影響下にある沿岸部や後背地の町では、商業言語 (lingua franca) としてイタリア語が話されていた。やがてヴェネツィア共和国が衰退していき、18世紀半ば頃からは「自由港」トリエステを商都の拠点としたハプスブルク帝国 (19世紀半ばからオーストリア・ハンガリー二重帝国) がアドリア海を掌握した。しかし商業言語としてのイタリア語の使用を許可したため、ヴェネツィア共和国を通じたイタリア文化のプレゼンスを保存した。こうしてアドリア海という海の回路を通じた人の移動と定着、商品の流通が、イストリア沿岸部に「三つの根」のなかのイタリア的な構成要素を定着させることに寄与したのである。現在もムッジャからロヴィーニ／ロヴィーニョを始めとしたイストリア沿岸部の町、さらにダルマチア沿岸の町は、ヴェネツィアの守護聖人サン・マルコの獅子像を掲げる旧市街の門、細長い鐘楼を中心としながら小路 (calle) が迷路のように入り組む景観といったヴェネツィア風のプレゼンスを保存している。それが町の観光資源にもなっている。

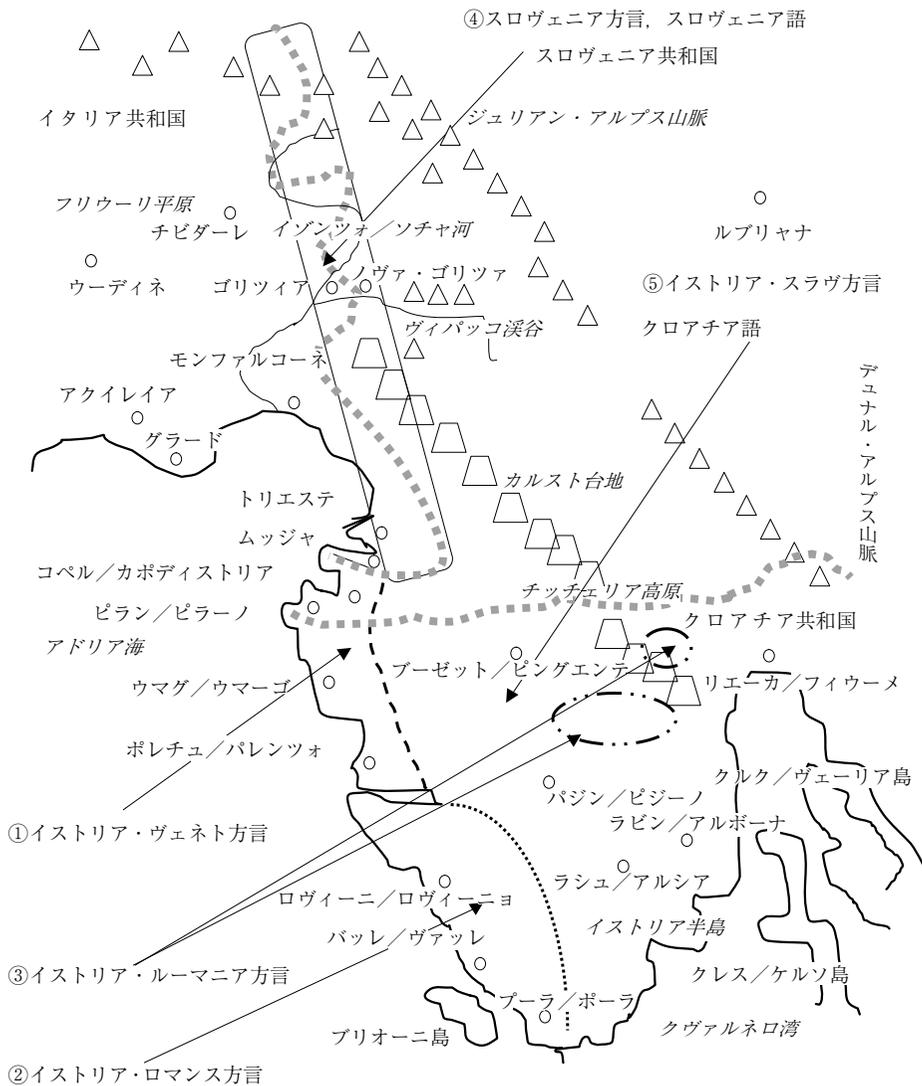
3.2 文化的な層と地政学的な層

前節では、イストリアの「地理的・物理的・生態学的な層」を人の移動と定着との関連について述べた。ここでは言語・方言の分布を通じて「文化的な層」を重ねあわせて見てみたい。

イストリア半島で話される言語・方言はおおむね以下である（併せて図-4も参照）。

- ① イストリア・ヴェネト方言（伊・スロヴェニア・クロアチア，半島西部沿岸）
- ② イストリア・ロマンス方言（クロアチア，半島南西部沿岸）
- ③ イストリア・ルーマニア方言（クロアチア，半島内陸部）：ルーマニア系との混成。
- ④ スロヴェニア方言，スロヴェニア語（半島北西部一帯）
- ⑤ イストリア・スラヴ方言，クロアチア語（半島ほぼ全域）

図-4 イストリアの文化的な層



出所：F. Toso, *Le minoranze linguistiche in Italia* (Bologna : Il Mulino, 2008), pp. 81, 207 を基に筆者が作成。

①イストリア・ヴェネト方言は、イストリア半島西部沿岸とそこから内陸部へ入った一帯で話され、ヴェネト方言を強く残す。前節で述べたように、これは海の回路を通じてヴェネツィア共和国の統治下にあった歴史を反映している。②イストリア・ロマンス方言は、半島南西部沿岸で用いられるが、イストリア・ヴェネト方言と異なり、フリウーリ平野で用いられるフリウーリ語との連続性を有しているといわれる⁴⁶⁾。③イストリア・ルーマニア方言は、半島内陸部のチツェリア高原のいくつかの町村でかつて話され、バルカン半島におけるルーマニア系言語の影響を残すものであったが、現在は消滅の危機にあるとされる。この方言の話者は、15世紀から16世紀におけるオスマン帝国の進出の結果、ダルマチア地方からイストリア半島まで大量のブラフ人が移動し、その後バルカン半島とトリエステ辺りまでを移牧の範囲としていたルーマニア系の羊飼いの人々だった⁴⁷⁾。ゆえにバルカン半島とイストリア半島の地理的・物理的・生態学的な層と人の移動を表わしていた。④スロヴェニア語はスロヴェニア領内にあたる半島北西部において、⑤クロアチア語はクロアチア領内にあたる半島ほぼ全域で話され、現在のマジョリティ言語になっている。ただし土地言葉の方言の影響を受けている。またこれらの五つに分けられた言語・方言は領域的に明確な境界線があるわけではなく、相互にゆるやかな重なり合いがある。したがってイストリアの「三つの根」は、公用語としてみればイタリア語・スロヴェニア語・クロアチア語であるが、その「根」は文化的な層のなかで交じり合いつつ、より複合的な様相を現している。

こうした言語・方言の層と重なるようにして、民族的マイノリティの人々がいる。イストリア半島には現在、2万人余りのイタリア語話者が暮らしている。半島西部のスロヴェニア領内では、2258人（全人口の0.1%）がイタリア民族への帰属を表明し、3762人がイタリア語を母語とすると答えている⁴⁸⁾。またスロヴェニアにおける全イタリア系マイノリティの約8割がイストリア沿岸部の都市に集住している⁴⁹⁾。半島ほぼ全域のクロアチア領内では、19636人（全人口の0.44%）がイタリア民族への帰属を表明し、20521人がイタリア語を母語だと答えている⁵⁰⁾。そのなかでイストリアに居住するイタリア系マイノリティは14284人（全住民の6.92%）であり、これはイストリア半島で最も数の多いマイノリティである。全クロアチアのイタリア人のなかで約7割がイストリアに集まっている⁵¹⁾。こうしたイタリア語話者は、スロヴェニアおよびクロアチアの憲法と特別法の枠組みのなかで民族的マイノリティとしての権利が保障されている⁵²⁾。またイタリア領内のスロヴェニア語話者は、国境地帯に約6万人暮らしているといわれる。そしてイタリア共和国の憲法、国法、州法の枠組みのなかで民族的マイノリティとしての権利が保障されている⁵³⁾。

ここで留意すべきは、言語・方言という日常生活にも根差す「文化的な層」と、民族や国民言語という法制度化された「文化的な層」との間が必ずしも連続していない点である。例えば、イストリアのイタリア語話者がマイノリティの権利を「外部」に訴える場合、イタリア人

という民族に基づく法制度的な回路を通じて行う。クロアチア語話者が圧倒的多数のバジン／ピジーノで「イタリア民族コミュニティ協会」の代表を務めている女性は、1990年代以前までイタリア語を話すことが極めて困難な環境だったという。ピジーノ博物館の所長を務めるイタリア系マイノリティの男性はここ数十年の変化によってようやく「勇気を出してイタリア語で話す」ようになったと振り返る⁵⁴⁾。こうしたなかでマイノリティの権利を訴える場合には、対外的には民族としての「イタリア人」の団結を示さなければならない。

しかしながら外部に示される「イタリア人」が日常生活まで支えているとは限らない。例えばバジン／ピジーノで話されるのは、イタリア語というよりイストリア・ヴェネト方言とイストリア・スラヴ方言が混じり合った土地言葉である。この土地でしか通用しない言葉も存在する。こうした状況は半島沿岸部の町や村でも共通している。イストリア・ロマンス方言圏とくられる町や村でもそれぞれ言葉が異なる。ロヴィーニ／ロヴィーニョ出身の詩人は「ロヴィーニョ人とヴァッレ人の方言はとても異なっている。13km 離れているのだけれど、ずいぶん違う」という。バツレ／ヴァッレ出身の詩人も「ヴァッレではいまも方言が話されている点も違う」という⁵⁵⁾。町ごとの土地言葉で詩や歌がつくられている。こうして「イタリア語」「スロヴェニア語」「クロアチア語」という国民言語レベルの多様性があるだけでなく、方言レベルの多様性に加えて、さらに方言の内部の多様性が町や村ごとに存在している。こうした方言やそれに結び付いた郷土への愛着はイタリアのどの地方でも見られるカンパニリズムと変わらないだろう。ただ異なるのは、マジョリティ言語ではないことから、これらの方言が常に消滅する可能性を抱えていることである。それゆえにイタリア系マイノリティの権利擁護や政治要求を外部に訴えるときには、「イタリア人」という民族の法制度的枠組みのなかで行わざるを得ない。しかし「外部」に対して向けられる資源動員の局面と、日常の生活や自己同一化のような「内部」に向けられる潜在的な運動の局面とは、民族や国民言語のような制度化された「文化的な層」と方言や土地言葉の発話行為のような制度からこぼれおちる「文化的な層」にズレが生じているのである。

このようにイストリア半島では言語・文化的な境界と政治的な境界が一致していない。また文化的な層の内部においても言語・方言・土地言葉が混じり合うことでまだら模様が多様性を含んでいる。クロアチアの2002年のセンサスでは、自らを「イストリア人」と答えた人が8862人（全住民の4.3%）存在した。この結果は公的な場面においても、自らをイタリア人でもなく、スロヴェニア人でもなく、クロアチア人でもないと同時に、いずれでもあるような「イストリア人」としての意識があることを示している。また政治的な次元において1980年代後半に地域政党の「イストリア民主会議」が結成されたときにも、こうしたまだら模様の多様性が内包されていた。ウマグ／ウマーゴで「イタリア民族コミュニティ協会」の代表を務め、自身も同政党の党員だったピポ・ロタ氏は「イストリア民主会議の代表I.ヤコチッチはこの

現実をよく理解していた」という。「この現実」についてピポ・ロタ氏はこう説明する。「私の親戚はボルツァーノ〔イタリア／オーストリア国境地帯の自治県であり、歴史的にドイツ語話者が多く暮らす町〕に住んでいる。ここではドイツ語学校に通うかイタリア語学校に通うか選ばねばならない。学校は本当に『壁』で仕切られている。だから同じ町で育ったにもかかわらず通った学校によってコミュニケーションができないことが実際に起こる。だけどここウマーゴでは、イタリア語とクロアチア語のどちらかに線を引いて『壁』を設けることはできない。なぜならそれほどイタリア語とクロアチア語が混じり合っているのだから。こうした地域の現実を踏まえて、1990年代にイストリア民主会議は私たちの地域主義を守るためにクロアチア中央政府と対決した。だから今、イストリアだけがクロアチアのなかで唯一の二言語主義を採用する群になったのです」と⁵⁶⁾。

こうした見方は、本稿の冒頭のエピソードとも重なる。「チルコロ・イストリア文化会」のような団体が展開する国境を越えた文化活動は、不定形なまだら模様の多様性にこそポテンシャルを見出そうとする。こうした文化的ネットワークの流れが、統合・拡大するヨーロッパという新しいコンテクストのなかでどのような役割を果たしていくのか。これを精査するためには、地政学的な層の重なりとこれからのあり方を検討する必要があるだろう。紙幅の都合からこの点については稿を改めて論じたい⁵⁷⁾。

4. 結びに代えて

これまでの議論をまとめて結びに代えたい。本稿の試論では、イストリア半島を事例としてヨーロッパの多様性を歴史的な多層性において捉えることを目的とした。そのために“境界領域”という概念の理論的な意味と実証的調査への含意を検討した。とくにその第1の側面である“テリトリーの境界領域”からイストリアの地理学的・物理的・生態学的・文化的・地政学的な層を検討した。そこから得られた知見は以下のことである。「ヨーロッパ回廊地帯」の一部をなすイストリア半島は、人の移動や商品の流通という利点と政治的・軍事的な不安定性によって特徴付けられる。このような環境から形成されてきた文化的な層の多様性は、民族や国民言語のような制度化された側面だけでは捉え難い。それは日常生活の実践や方言や土地言葉による発話行為といった不定形なまだら模様の多様性として潜在している。冒頭で提示された「三つの根をもつ一本の大きな榎の木」というイストリア半島のメタファーについても、〈三つの民族・国民言語という「単ルーツ型の根」がヨーロッパ統合・拡大によって「一本の木」になる〉という単線的な理解ではなく、〈対外的には三つの民族・国民言語として「三つの根」を表明しなければならないとしても、イストリアという固有の環境に「根」をはりながら巡回する根茎として「一本の榎の木」を構成していく〉過程に注意を向けて理解する必要があるだろう。

謝辞：本稿の執筆に際して、中央大学の新原道信先生、多摩美術大学の中村寛先生、中央大学大学院博士課程の阪口毅さんから多くの示唆を頂きました。記して感謝申し上げます。

付記：本稿は、以下の研究成果の一部である。鈴木鉄忠（研究代表者）「イタリア・スロベニア・クロアチア間国境地域の『国際協力と共生』可能性の質的調査」（科学研究費補助金・特別研究員奨励費、平成 23 年度～平成 25 年度）。

注

- 1) N. Giraldi, "Una grande quercia con tre radici", *Voce del popolo*, 2012 年 1 月 7 日記事。
- 2) 新原道信「島嶼社会論の試み—『複合』社会の把握に関する社会学的考察」『人文研究』第 21 号, 1992 年, 160-162 ページ。M. Niihara, "Un tentativo di ragionare sulla teoria dell'insularità. Considerazioni sociologiche sulle realtà della società composita e complessa : Sardegna e Giappone", *Quaderni bolotanesi*, n. 18, 1992, pp. 183-184.
- 3) 新原道信「深層のヨーロッパ・願望のヨーロッパ—差異と混沌を生命とする対位法の“智”」永岑三千輝・廣田功編著『ヨーロッパ統合の社会史—背景・論理・展望』日本経済評論社, 2004 年, 306-307 ページ。
- 4) E. グリッサン, 管啓次郎訳, 『〈関係〉の詩学』インスクリプト, 1990 年 (訳書 2000 年), 18 ページ。
- 5) 新原道信『境界領域への旅』大月書店, 2008 年。新原道信「A. メルッチの“境界領域の社会学”—2000 年 5 月日本での講演と 2008 年 10 月ミラノでの追悼シンポジウムより」『中央大学文学部紀要』社会学・社会情報学 20 号, 2010 (a) 年。新原道信「“境界領域”のフィールドワーカー—サルデーニャからコルシカへ」『社会科学研究所年報』中央大学社会科学研究所, 第 15 号, 2010 (b) 年, 1-23 ページ。新原道信「“境界領域”のフィールドワーク(2)—カーボベルデ諸島へのフィールドワークより」『社会科学研究所年報』中央大学社会科学研究所, 第 16 号, 2011 年, 68-69 ページ。
- 6) 新原, 前掲書, 2011 年, 68 ページ。
- 7) 同書, 69 ページ。
- 8) V. W. Turner, *The Ritual Process : Structure and Anti-structure* (Chicago : Aldine Publishing Company, 1969) = 富倉光雄訳, 『儀礼の過程』新思索社, 1996 年 (第 2 版), 126-127 ページ。
- 9) P. Zanini, *Significati del confine* (Milano : Bruno Mondadori, 1997), pp. 92-94.
- 10) E. W. Said., *Reflections on Exile and Other Essays* (Cambridge Massachusetts : Harvard University Press, 2000) = 大橋洋一, 近藤弘幸, 和田唯, 三原芳秋共訳『故国喪失についての省察 1』みすず書房, 2006 年, 174 ページ。
- 11) P. Ballinger, *History in Exile* (Princeton : Princeton University Press, 2002).
- 12) M. コラファートによれば, ボスニア出身のノーベル賞作家イヴォ・アンドリッチは, ボスニアにおける「憎しみの抑圧」の問題を指摘している。「この憎悪の致命的な特徴はボスニア人が自分たちの内部に息づく憎悪に気付かずこれを分析することを恐れ—あまつさえ分析を試みる人をすべて憎悪するというところにある」。ここでいう「ボスニア人」を, イストリア半島やトリエステで国境線引きを体験した人に置き換えても当てはまるのではないか。コラファートはアンドリッチの文章を受けて「『致命的なこと』, すなわち憎しみと破壊の繰り返しは, 抑圧のうちにある」として, 「根こぎ」[心の境界線]が即自的なままであることが繰り返される破壊の源であると分析している(ミケーレ・コラファート, 「『物語ること』と国境—イヴォ・アンドリッチによって示唆されたひとつのモデル」(= 中村勝己・鈴木鉄忠共訳)『法学新報』中央大学法学部, 第 115 巻第 9・10 号, 2009 年, 891-924 ページ。
- 13) 同書, 同ページ。

- 14) H. アーレントは「思考」という観点から「自分の自分自身との無言の対話」の重要性を論じている。「ソクラテスにとって〈一者のなかの二者〉の二者性が持っている意味は、もし思考したいのであれば対話を行なう二人がいい関係にあって、パートナー同士が友人であるように配慮せよ、ということに他ならなかった」「ソクラテスが発見したのは、他人とつきあうのと同じように自分とつきあうこともできるということであり、この二種類のつきあいには相互関係があるということである」(H. アーレント『精神の生活(上)』岩波書店, 1994年, 214-223ページ.)
- 15) 前回の拙稿でこの側面を「コムニタス」(V. W. ターナー)から理解しようとした。鈴木鉄忠「国境を踏み固める小道(3)―追悼におけるイストリア故国喪失者の“わたしたち”」『社会科学研究所年報』, 中央大学社会科学研究所, 第16号, 2012年, 123-143ページ。
- 16) 上村忠男『ヘテロトピアの思考』未来社, 1996年。新原道信「ヘテロトピアの沖縄」西成彦・原毅彦編『複数の沖縄―ディアスポラから希望へ』人文書院, 2003年, 420-424ページ。
- 17) 新原道信, 前掲書, 2011年, 69ページ。
- 18) 石田信一「クロアチア―民族と国家の相克」羽場久美子・小森田秋夫・田中素香編『ヨーロッパの東方拡大』岩波書店, 2006年, 323ページ。
- 19) 新原道信, 前掲書, 2011年, 69ページ。
- 20) F. Braudel, 1966, *La mediterranee : et le monde mediterraneen a l'epoque de Philippe II*, (Armand Colin, 1966) = 浜名優美訳『地中海①』藤原書店, 1999年, 21-23ページ。
- 21) A. Melucci, *The playing self : Person and Meaning in a Planetary Society*, (New York : Cambridge University Press, 1996) = 新原道信・長谷川啓介・鈴木鉄忠訳『プレイング・セルフ―惑星社会における人間と意味』ハーベスト社, 2008年, 12ページ。メルッチの時間論については以下を参照。新原道信「A. メルッチの『時間のメタファー』と深層のヨーロッパ―『フィールドワーク／デイリーワーク』による“社会学的探究”のために」『中央大学文学部紀要』社会・社会情報学21号・通巻238号, 2011年。
- 22) F. ブローデル, 前掲書, 21ページ。
- 23) A. メルッチ, 前掲書, 13-17ページ。
- 24) 内的時間に関してメルッチは以下の著書で論じている。A. Melucci, *Corpi estranei : Tempo interno e tempo sociale in psicoterapia*, (Milano: Ghedini, 1984). A. Melucci e A. Fabbrini, *I luoghi dell'ascolto: Adolescenti e servizi di consultazione*, (Milano: Guerini, 1991). A. Melucci e A. Fabbrini, *L'età dell'oro: Adolescenti tra sogno ed esperienza*, (Milano: Guerini, 1992)。
- 25) 「身体的な病は、他の形では発せられようがなかった言葉を表現し、徴候に込められた沈黙の声は、聴かれるべき内なるリアリティの欲求を知らせてくれる」(A. メルッチ, 前掲書, 27-29ページ)
- 26) J. ハーバマスは言語的コミュニケーションに着目したが、メルッチは身体のような前言語的コミュニケーションをも考察に含めた。この点について山之内靖はこう説明している。「ハーバマスは、彼の認識の片隅では前言語的、前概念的領域の存在を意識していた。しかしハーバマスは、結局、言語的コミュニケーションの場にすべてをゆだねてそこに自己完結的な空間を描きだした。これに対してメルッチは、言語的・制度的表層と身体的深層の両分野に眼を配り、情報化された現代社会は、両分野の境界線を越境して人間の生物的・動機的構造までもを資源化したことにより、克服不能なディレンマを抱えるにいたったとする。現代社会におけるアイデンティティーの不確定性に深く関心を寄せるという点では一致しておりながら、両者の分析は一八〇度といってよいほど異なっている。ハーバマスは言語コミュニケーションのなかに機能主義的理性を超える可能性を読み取ろうとする。身体を介して深層領域に掘り下げてゆくメルッチは、むしろ沈黙のなかに理性の声を聴こうとする。他者および自然とのコミュニケーションのなかには、冗舌な発話が絶え、静寂が支配することなしには聞こえてこない深層の部分があるからである」(山之内靖「システム社会の現代的位相

- (下)』『思想』804(6), 1991年, 122ページ)
- 27) A. Melucci, "Sociology of Listening, Listening to Sociology" = 新原道信訳「聴くことの社会学」地域社会学会編『地域社会学会年報』第13号, 2001年, 1-14ページ. 新原道信, 「聴くことの社会学のために二〇〇〇年五月の“賭け (progetto)”の後に」『地域社会学会年報』第13号, 2001年, 15-19ページ.
- 28) 「螺旋という不思議で謎に満ちた記号は, 一つの動きのなかに円, 矢, 点というパターンを組み入れたものであり, 絶えず元の場所に戻ってくるが, しかしいつも違う平面に着地するような運動を行う」(A.メルッチ, 前掲書, 19-20ページ.)
- 29) 同書, 18ページ.
- 30) 新原道信は, (未発の状態)をこう捉えている。「社会学者アルペローニが提起した“未発の状態 (stato nascente)”は, 社会運動の生成期, 成長期, 沈静化の時期をいささか線的に表したものであったが, 1968年以後の世界の“道行き (passaggio)”と重ね合わせて考えてみるならば, ことなる社会認識の文脈でとらえかえされることになるだろう. すなわちこの問題提起は, 線的な移行過程の一段階であるというよりは(例えば『固有性の消失』から『画一化』へという単線的な経路 [ルート]ではなく), 一見かかわりのなさそうな, 些末で“端/果て”の意味しかもたない問題とされていたものが, それぞれに固有の動き方をしていき, 同時に多方向的に, 複数の異なる仕方では, “メタモルフォーゼ”していくということが, むしろ常態となりつつある状況が, その社会に固有の条件となっている—このように見方から社会の『発展』を理解するための問題提起として再評価することができるはずだ」新原道信, 前掲書, 2010(b)年.
- 31) 鈴木鉄忠「国境を踏み固める小道—『短い20世紀』以後のイタリア東部国境地域社会変容に伴うローカルの『再審』試論」『社会科学研究所年報』中央大学社会科学研究所, 第14号, 2010年, 169ページ注12参照.
- 32) 新原道信, 前掲書, 2011年, 69ページ.
- 33) F. Braudel., op. cit., 34および31ページ.
- 34) 佐藤彰一は, 先史時代から「ヨーロッパ半島」への東方異民族の進出の常態化, そしてオスマン帝国による東方異民族の移動の停止とそれの定着に, それ以後のヨーロッパの多様性の歴史的背景をみている。「紀元前一万二〇〇〇年に始まる中石器時代からこのかた, さまざまの民族がこの半島に到来し, 一部は定着し, 一部は再び東ヨーロッパの回廊を通してアジアの草原地帯に通ずる道を引き返した」「オスマン・トルコ人のヨーロッパ侵入の歴史的意義は, ビザンツ帝国に引導を渡したこともさることながら, 数千年にわたって続いてきた環地中海世界の背後に広がる広大な中央ヨーロッパ空間における, 東方から到来した諸民族の『椅子取りゲーム』に終止符を打ったことである. それ以後, 大がかりな東方民族のヨーロッパ侵入は, 現代にいたるまで見られない. 太古以来の中央ユーラシアからヨーロッパ半島に進出する回廊を封鎖し, これに栓をってしまったのである」(佐藤彰一『中世世界とは何か』岩波書店, 2008年, 2ページ, 20ページ). この視点については古城利明先生から示唆頂いた(古城利明『「帝国」と自治—リージョンの政治とローカルの政治』中央大学出版部, 2011年, 49ページ).
- 35) G. Valussi, *Regioni d'Italia* (Torino : Unione Tipografico-Editorice Torinese, 1961), p. 14.
- 36) Ibid., p. 14.
- 37) Ibid., p. 14.
- 38) G. Valussi, *Il confine nordorientale d'Italia* (Gorizia : I.S.I.G, 2000), p. 14.
- 39) D. Alberi, op. cit., pp.22, 26.
- 40) G. Valussi, op. cit., 2000, p. 16.
- 41) D. Alberi, op. cit., pp. 113-114.

- 42) G. Valussi, op. cit., 2000, p. 14.
- 43) D. Alberi, op. cit., pp. 311-313.
- 44) Ibid., pp. 1009-1011.
- 45) F. Braudel, op. cit., pp. 86-91.
- 46) F. トーゾによれば、イストリア・ロマンス方言をめぐってイタリア研究者と旧ユーゴスラヴィア側で見解の異なりがあるという。一方でイタリア研究者はこの方言をフリウーリ地方（さらには北イタリアの山岳地帯で話されるラディーノ語）との関連やヴェネト方言のヴァリエーションと見なすが、他方で旧ユーゴスラヴィア側は、この方言がすでに消滅したダルマチア地方の言葉と関連を持ち、イストリア・ロマンス語として独立して存在すると主張する（F. Toso, op. cit., p. 213.）。
- 47) 直野敦「バルカン半島におけるルーマニア系言語」『一橋論叢』84(6), 1980年, 766-772ページ。
- 48) Statistical Office of the Republic of Slovenia, Census of population, households and housing 2002 (http://www.stat.si/popis2002/en/rezultati/rezultati_red.asp?ter=REG&st=17 2013年1月25日アクセス確認)。
- 49) イストリアの各自治体で見ると、港湾都市カポディストリアが712人（住民全体に占める割合は1.5%、以下同様に表記）、ピラーノ／ピランが698人（4.2%）、イゾラ／イゾラが430人（3.0%）である。
- 50) Croatian Bureau of Statistic, Census 2001 (http://www.dzs.hr/default_e.htm 2013年1月25日アクセス確認)。
- 51) イストラ群の主要な町のイタリア系マイノリティの割合を見ると、半島沿岸部西岸のウマーゴ／ウマガでは2365人（全住民の18.3%、以下同様に表記）、やや内陸に入ったところのプーイエ／プーイエでは1587人（29.7%）、沿岸部のチッタノーヴァ／ノヴィグラードでは511人（12.8%）、パレンツォ／ポレチュエでは738人（4.23%）、ロヴィーニョ／ロヴィーニでは1628人（11.4%）、半島南端の港湾都市ポーラ／プーラでは2824人（4.8%）、内陸部にありスロヴェニアとクロアチアの国境付近にあるピングエンテ／ブゼットでは49人（0.8%）、イストラ群の行政的中心であるピジーノ／パジンでは114人（1.2%）、かつて炭鉱の町だったアルポーナ／ラビンでは367人（3.0%）である。
- 52) 以下のような権利が認められている。イタリア語で教育を受ける権利、公共の場でのイタリア語の使用と二言語標記の使用、国旗など民族のシンボルを使用する権利、組織団体を設立する権利、故国イタリアとの関係をもつ権利、イタリア系自主管理共同体を設立する権利、町議会と国会に代表者を選出する権利（SLORI e Unione Italiana, *Invito a conoscere le minoranze*, Capodistria, Trieste : Unione Italiana e Slovenski Raziskovalni Inštitut, 2007）。
- 53) 以下のような権利が認められている。スロヴェニア語による学校教育、家庭教育の権利、居住地域の行政機関においてスロヴェニア語を使用する権利、居住地域の公共の場において二言語表示をする権利、組織・結社・労働組合等を設立する権利、自らの政治的代表者を選ぶ権利、経済活動を行う権利、差別に対して保護を要求する権利、裁判でスロヴェニア語を使用する権利（Ibid.）。
- 54) 2009年5月17日に「チルコロ・イストリア文化会」が主催したピジーノ（クロアチア）へのエクスカーションに参加したときのフィールド・ノートより。
- 55) 2009年10月13日に「チルコロ・イストリア文化会」がモンファルコーネ（イタリア）で催した会合「イストリア・ロマンス方言の詩の紹介」に参加したときのフィールド・ノートより。
- 56) 2009年7月2日に「チルコロ・イストリア文化会」が主催したウマーゴ（クロアチア）へのエクスカーションに参加したときのフィールド・ノートより。
- 57) イストリアを含むヴェネツィア・ジュリア地帯における地政学的な層の歴史的な変動については、「フロンティア」の観点から古城利明が検討している（古城, 前掲書, 2011年）。今後はこの観点と「文化的な層」の関連をあわせて考察したい。

